

# 会長を退任された平松氏へ 今までの歴史、これからに ついての想いを取材しました！



一生の  
宝物



サプライズで訪問！記念品を贈呈しました。  
左：新会長 浅川氏 右：平松氏

取材者：

高知リハビリテーション学院(現：高知リハビリテーション専門職大学)  
15期卒業 田上 大祐(仁淀清流苑)

私は、平松氏に担当教員をしていただきました。決して、真面目な学生とは言えなかった私に、作業療法士の仕事の素晴らしさを教えてくれました。今回の取材で、学生に伝えなかった大切な想いを、改めて聞かせていただき、もう一度授業を受けている気持ちでした。いつも対象者や学生のことを大切に想っている、平松氏の想いを一人でも多くの会員の方々に知っていただきたいです！

ベスト  
ワード

自分が関わって、その方の生活が少しでも豊かになったら、作業療法士として一番の幸せでしょ。だって、対象者に笑顔になって欲しいじゃない。一人でも二人の方でも、自分が力になれば、この仕事をしていて良かったと思う。

その人の人生を大切に想ってくれる作業療法士になってくれたら、教員としてこれ以上嬉しいことはないじゃない。

## Q. 地域活動が大切であると感じたきっかけ

平松氏

卒業後働き始めたのは、急性期から回復期が中心の病院で、当時は現在のような介護保険法や障害者総合支援法の各種サービスがない時代でした。そのため、退院しても家の中だけの生活で、外出できずに、他者と関わる事がなくなった方や、したいことを諦める方もおられました。作業療法が自宅での生活に繋がらない現実の中で、悔しい思いをしたことを今も覚えています。現在のようなサービスや、スマホなどの機器を利用して、人と繋がる手段があれば、作業療法士としてできたことがもっとあったと思っています。

## Q. 平松氏の作業療法のルーツ

平松氏

退院前後の訪問などを、診療報酬に関係なく先駆けて実施していた病院で勤務したことが、私の作業療法士としての基盤です。当時、勤務中に利き手が機械に挟まれて、挫滅創と屈筋腱損傷を罹患した女性を担当した際、利き手はかろうじてピンチができる程度しか可動範囲も筋力もない状態に対して、できることとして「クロス刺繍」を活動種目にしました（もう〇十年前なので詳細は…）。その女性が退院した後、「クロス刺繍」の作品を、私にプレゼントとしてくれたのです。生活で実際に利き手を使っている証は、作業療法士としての宝物なので、今も大切にしています。

高知に来てからは、地域の保健師や他の病院のリハスタッフと集まって、自分たちが働く地域で何ができるのか、勉強会を定期的に行っていました。時々、飲みニケーションもしていましたけどね（笑）。このメンバーで、住民の方への啓発活動として、寝たきり予防をテーマに寸劇をしたり、皆で色々と考えて楽しかったです。作業療法士は私一人だけでしたが、連携の必要性を他職種の方々に理解してもらえて、自分一人の力は微力でも、人と繋がることで大きな力となった経験は、私にとって財産ですね。

## Q. 教員になろうと思ったきっかけ、大切にしていること

平松氏

これから作業療法士を目指す人が、住み慣れた地域で、その方がしたい生活を達成するためにはどうしたらいいのか、その方の人生に関わる職種として、想いを大切に、考える人になって欲しいと思ったことが、きっかけです。授業で教えているけど、学生の時には理解することが難しいよね。（田上：私はよく平松先生に厳しい指導を受けました（笑）。厳しい指導をした学生のことは今でも覚えているみたいですよ。（- “” -）笑）

卒業生が、働く中で地域における作業療法の大切さに気づき、地域で活動していることを見聞きした時には、教員をして良かったと思います。

今も授業では、障がいの疑似体験やオムツ体験などを続けています。対象者の「大変さ」「しんどさ」「様々な思い」を、疑似体験を通して知ること、どこに視点を向けるべきなのか考えて欲しいと思っています。これからもずっと続けて行く予定です。オムツはいっぱいストックしてますよ（笑）。

## 会員へメッセージ

その人が望む生活は、その人の生活場所に行かないとわかりません。だからこそ、地域へ出向くことが大切だと思っています。作業療法士が実際の生活の場で、様々な工夫点や助言、環境設定を行うことによって、その人が望む生活ができるようになると、その人だけではなく関わる皆が笑顔になります。会員の皆さんも、地域へ一歩踏み出してみませんか。

地域の中で作業療法士としてできることはたくさんあります。地域の方は、作業療法士を待っています。皆様のご活躍を楽しみにしています。